

国立民族学博物館の収蔵品 67

ポルトガルのギターとワイン

ポルトガルは南北約五六〇km、東西約二〇〇kmほどとそれほど広くないにもかかわらず、地域ごとに異なる独特のギターと音楽がみられて興味深い。民博の音楽展示場では六本のポルトガル各地のギターが展示されている。

これらのギターは国内で入手が困難なので、展示の製作に際し、ポルトガル各地に実際に赴きギターの収集と製作や演奏の様子の映像取材を行った。ヴィオラ・ブラゲーザもそうしたギターの一つである。このギターは、ポルトガル北部に位置し、信仰の町として知られるブ



ヴィオラ・ブラゲーザの演奏



倉庫内のギター・ケースとワインの収納棚



ヴィオラ・ブラゲーザ

ラガとその周辺で演奏されている。ギターと聞くと六本弦の形状が思い浮かぶが、ポルトガル各地のギターはそれとは異なる。ヴィオラ・ブラゲーザも、複弦五コースのやや小ぶりなギターである。ヴィオラ・ブラゲーザの収集の際は、現地の研究者の案内でブラガ近郊のギター工房を訪れた。作業場でギターの製作や演奏やギター職人のインタビューの映像取材を行い、工房のオーナーと収集の交渉をすませて周囲をぶらついていると、作業場の隣の部屋に積み上げられたギター・ケースが目にとまった。ギターの倉庫かと思っただけの中に入ると、ギター・ケースの隣に色つきのガラス瓶が壁面いっぱい収められた棚があり、床にはたくさんの空き瓶が置いてあった。個人の飲用をはるかに越える瓶の量に、不思議に思っただけで工房のオーナーに尋ねると、彼は、それらはワインの瓶で、ここではギターとともにワインの製造も行っているが、ワインに興味があるかという。ギターと同じくらいあると答えると、仕事もすんだことだし、自慢のワインを一杯どうだということになり、積み上げたギター・ケースをテーブル代わりにちょっとした酒宴となった。

その際、私がヴィオラ・ブラゲーザを取り弦を弾いていると、ほろ酔い加減の職人がやって来て、弾き方の手ほどきをしてくれた。初心者向けの簡単な曲だったのか、初めてなのに弾けてしまった。すると職人は、少し難しい曲を弾いてやってみろというが、それもなんとか弾けてしまった。そんなやり取りが何度か続いた私と彼とのギター合戦も、酒席の一興だった。ポルトガルではヴィオラ・ブラゲーザに限らず、ほかのギターの収集の際にもギターを介して地元の人々と親しく交わった挿話に事欠かない。そうした挿話は、ギターが各地の人々の暮らしの中でいかに身近な存在となっていたかを示しているのではないだろうか。